ここがポイント
「言葉への自覚を高める」ための言語活動を設定する

1　国語

☆ねらいを定めて指導する

まずは、各科目が育成を目指す資質・能力を確認することが必要です。その上で、各自が担当する科目について、科目目標の実現に資する言語活動を設定する力が求められます。これらは教科会等で随時確認していき、教員間で共通理解を図っておくと良いでしょう。「学習指導要領解説」には、指導事項に即した言語活動例も掲載されています。それらを参考に、科目のねらいに沿った授業づくりをしましょう。

☆専門力を高めるために

国語科教員としての専門力を高めるために実践していることを先輩教員に聞きました。皆さんもできることから取り組みましょう。

- 週に一冊本を読む
- 読書記録を付ける
- 授業で扱う作家の作品集や、作品に係る評論等を読んでおく
- 定期的に図書館、文学館美術館等に出かける
- 研究会・部会に参加する
- 創作サークルに所属する
- 新聞記事に毎日目を通す
- 通勤中、ポスターや看板、チラシ等の表現をチェックする
- 他教科等の言語活動の様子を見学し、生徒の活動状況を観察する
- 考えた単元構想を日頃からメモしておく

など

「言葉への自覚を高める」ための言語活動

場面や状況、伝える内容、そのときの相手への心情等に応じて、言葉や伝え方は使い分けられます。

国語の授業づくりには、言葉の表現意図や効果、文化的背景等について「考え」「気付く」ことができる工夫が必要です。言語活動を通して、生徒が言葉への自覚を高められるようにしましょう。

国語科教員に必要な専門力

所属校の教育活動全体において、国語教育が重要な役割を担うことは言うまでもありません。そのため、国語科の教員には様々な専門力が求められます。いくつか例を挙げてみます。

- ■素材（文章、図表、資料など）自体の読解力、分析力
- ■素材の背景にある文化・社会的背景に対する知識・理解
- ■生徒の実態を的確に見取る力
- ■身に付けさせたい資質・能力の育成に適した言語活動を設定する力
- ■指導事項と生徒の実態に適した素材を選択する力
- ■選択した素材を言語活動に合わせて教材に変える力
- ■実践した指導の結果を適切に評価する力　　など

これらの力は一朝一夕に身に付くものではありません。国語科教員に必要な専門力を少しずつ高めるために、学び続けましょう。

一つの単元で学ぶ領域を一つに絞る

国語の資質・能力のうち「思考力，判断力，表現力等」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三つの領域に分けられますが、複数の領域の指導を一つの単元に詰め込むと、どのような資質・能力を身に付けさせようとしているか、生徒に伝わりにくくなってしまいます。「一単元一領域」の原則に沿って授業づくりをすることで、指導のねらいを絞って教育効果を高めましょう。

このとき注意すべきことは、

指導する領域と言語活動は一致するとは限らない

ということです。教材の内容理解を深めるための話合いならば「読むこと」の指導になります。目標に資する活動にするためにも、「この言語活動はこの領域の力を身に付けさせる活動として適切か」を常に自問しながら言語活動を設定しましょう。

<例> 資質・能力ベースの「言語文化」の授業

目標とする資質・能力によって単元指導計画は異なります。例として「羅生門」を用いた指導計画を紹介します。　→　１章－２

目標とする資質・能力　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。（Ｂ読むこと(1)イ）

「問い」　下人には、なぜ名がないのか。

言語活動

① 通読後、「問い」について考えをまとめる。〔個人〕
② 「羅生門」の内容を確認する。〔全体〕
③ 草稿段階では「交野平六」等の名が付いていたことを知る。
④ ②③を踏まえ、「問い」について再考する。〔個人〕
⑤ 班で④を共有し、他者の分析の視点を知る。〔班〕
⑥「問い」に対する自身の最終的な考えを、本文の描写を根拠にしてまとめる。〔個人〕

振り返り　単元の活動を通して、自分にどのような考え方が身に付いたか分析してまとめる。

目標とする資質・能力　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。（Ｂ読むこと(1)エ）

「問い」　芥川龍之介は、どのような効果をねらって元の作品を改変したのか。

言語活動

① 「羅生門」の内容を確認する。〔全体〕
② 「今昔物語集」巻二十九第十八話、巻三十一第三十一話と比較して相違点を挙げる。〔個人〕
③ ②を班で共有し、作者が改変した理由を考察する。〔班〕
④ 班でまとめた考察を全体で共有する。〔全体〕
⑤ 「問い」について個人で考察する。改変部分のうち一点以上を取り上げて、改変によって得られた効果をまとめる。〔個人〕

振り返り　改変部分を意識しながら「羅生門」を読み返して、新たに気付いたことをまとめる。

留意点：
これらで行われている言語活動は「話合い」活動と「書く」活動ですが、いずれも「読む」力の育成をねらいとした活動であるため「読むこと」の領域で評価します。

☆国語における「問い」

同じ教材文でも異なる資質・能力に働きかけることができる国語の授業にとって、目標とする資質・能力に沿った「問い」を立て、生徒に提示することは非常に重要です。

「問い」を提示されることで、生徒はどのような表現に注目して作品と向き合えばよいか、単元のゴールは何かを知ることができるため、学習の見通しが立てやすくなり、生徒の「主体的な学び」の実現にもつながります。

国語が「言葉への自覚を高める」ことを目指していることを念頭に置いて、「問い」を設定しましょう。

☆「古典を学ぶ意義」

今を生きる生徒がなぜ古典教材を学ぶのでしょうか。授業で古典を扱う際には、生徒自身が古典を学ぶ意義について「考え」「気付く」ことができるように、

- 先人のものの見方･考え方に触れ、生徒自身の経験や考えと比較しながら考えを広げたり、深めたりする。
- 原文を題材とした文章（解説や評論等）を副教材として活用する。

といった活動を効果的に取り入れた授業づくりをすることが大切です。

そのためにも、古典を学ぶ意義について、まず教員自身が見解を確立しておくことが求められます。